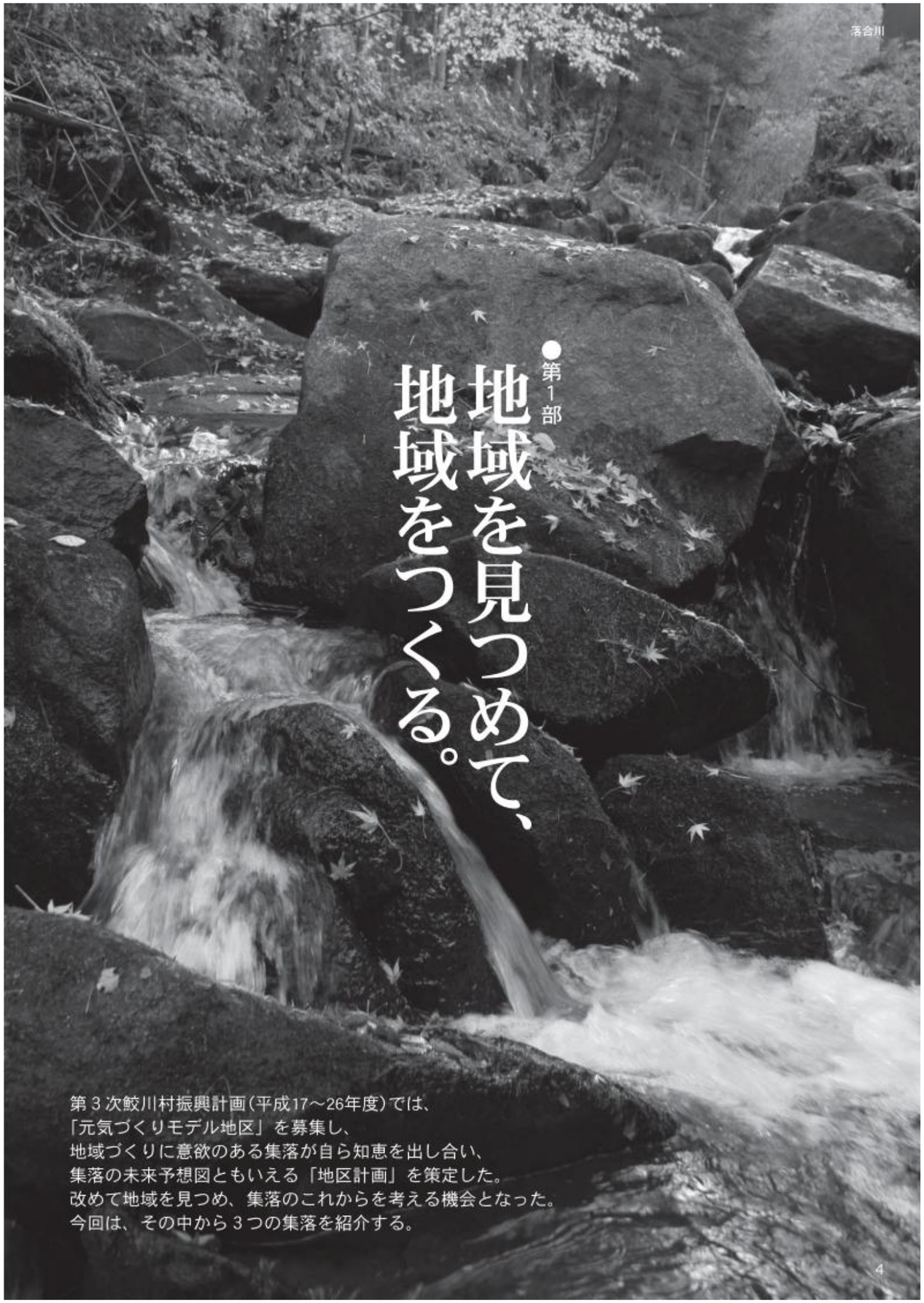

●第1部

地域を見つめて、地域をつくる。

第３次鮫川村振興計画（平成17～26年度）では、
「元気づくりモデル地区」を募集し、
地域づくりに意欲のある集落が自ら知恵を出し合い、
集落の未来予想図ともいえる「地区計画」を策定した。
改めて地域を見つめ、集落のこれからを考える機会となった。
今回は、その中から３つの集落を紹介する。

柿の実りは地域の実り オーナーとの交流で元気な集落に

春りんどうの会（赤坂西野／荻ノ沢・塩倉集落）

地域のみんなが集まる場所を作りたい

荻ノ沢集落の六世帯と塩倉地区の二世帯が参加して地域づくりを行っている「春りんどうの会」（関根政雄会長）。平成十七年、「山の神」の席で、「地域のために何かをやろう」という話になり、柿の木を植樹することで話がまとまった。

「年々遊休農地が増え、このままではこの地域がなくなってしまう、何とかしなければと思っていました」と、初代会長を務めた関根成男さんは当時を振り返る。さらに続けて、「昔は花見や山の神の祭り、集会などで集まる機会がありました。しかし、今はそれぞれ仕事も違うし、そういう機会も少なくなりました。柿の木を植えようと考えたのは、地域のみんなが集まる場所を作りたいと思ったからです」

柿の木に着目したのは、荻ノ沢集落が昔から柿の栽培に適していたということ。また、加工などの可能性も考えてのことだった。

さらに、「柿の木のオーナー制度」を計画。対象は首都圏ではなく、福島県以北、特に北海道に目を向けた。「関東以南では、柿など珍しくないでしょうが、北海道では柿がならないんです。北海道の知人に柿を送ったら、とても感謝されたこともあり、知人などの口コミでオーナーを募集することにしました」と現会長を務める関根政雄さんは話す。

オーナーは一口につき一本の柿の木を所有。十一月下旬には「里山の収穫祭」と称し、柿の収穫を兼ねてオーナーを集落に招待する。収穫祭では、柿の渋抜きや追肥、せん定などの管理作業を行うほか、昼食には郷土料理を味わいながら地元住民との交流を図る。現在は北海道をはじめ県内外の四十五人がオーナーとなっている。

身の丈に合った規模で地道に活動を

会に対する村などからの補助金はない。柿の木の手入れに必要な薬剤や資材の経費など、活動していく上で資金面の問題がある。

「活動を長続きさせるためには、補助金に頼らず身の丈に合った規模で地道に活動していかなければならないと思います。新たな収益事業を始める必要もあります」と関根会長は話す。

さらに、「若い人たちと活動を共有して、引き継いでいかなければいけません。木は生き続けていきますし、オーナーさんたちも交流を楽しみにしています。より一層、地域の絆を深めていきたいです」と話してくれた。

1 柿の木のオーナーは、北は北海道から南は神奈川県まで。中には歌手の長渕剛さんの名前もある／**2** オーナーを招待して毎年秋に開かれる「里山の収穫祭」／**3**「春りんどうの会」の会員の皆さん

里づくりの基礎は地域の絆 交流事業で集落に元気を呼び込む

落合里づくり協議会（西山／落合集落）

集落のシンボル「落合の大もみじ」

「大もみじは集落のシンボル。落合の誇りです」と話すのは、落合里づくり協議会の会長を務める本郷弘義さん。紅葉の時期になると、村外からも紅葉狩りに訪れる人がいる紅葉の名所となっている。毎年十一月には、色づいた「大もみじ」の下で集落の子どもから高齢者まで集まり、「もみじ祭り」が開かれる。

協議会は、平成十七年に集落での話し合いが始まり、平成十八年六月に設立。落合集落の全世帯が加入し、全住民がメンバーとなっている。現在は、大学生などの体験活動の受け入れ、研修や勉強会への参加、「大もみじ」周辺の景観維持管理などが主な活動となっている。

女性メンバーの活躍が不可欠

体験活動の受け入れには、女性メンバーの活躍が不可欠だという。落合集落には、協議会の設立以前から女性たちで構成する「ひまわり会」がある。ひまわり会は、結成から今年で三十年余り。一年ごとに役員を持ち回りで務め、農繁期を除いた時期に旅行や忘年会を行い、女性同士の親ぼくを深めている。

「集落内の交流が盛んだから、みんな同じ気持ちで取り組むことができているんだと思います。まとまりがなければ、受け入れもできないですから」と女性メンバーの一人、我妻久子さんは話す。

「女性だけでなく、若い人たちもまとまりがあるんですよ。代々、落合の人たちは、そういうつながりがあるんです」

この地域の絆の強さが活動の基礎となっているようだ。

1　集会所に集まり活動について話し合う会員の皆さん／2　集落のシンボル「大もみじ」を眺めながら親ぼくを深める「もみじ祭り」／3　体験活動の受け入れで集落は活気づく

収益よりも交流を大切にしたい

協議会のメンバーが口をそろえて話すのは、受け入れによって収益を得ることより、交流を大切にしたいという思いが強いということ。地域内の交流は盛んであるものの、集落の人口が減少していることは事実で、村外から訪れる人たちとの交流は貴重だ。その交流によって、集落は活気づくのだという。

「外から人がやって来るから、景観を守ろうという気持ちにもつながっていると思います。これからも無理をせず、できる範囲で受け入れを行っていきたいです。そして、みんなで協力し合いながら活動していくことによって、さらに集落の絆を強めていきたいです」と本郷会長は話してくれた。

「めん羊」で景観保全と地域循環型農業の確立を目指して

中沢めん羊の里づくり組合（富田／中沢集落）

農業を核に集落に活気を取り戻す

富田字中沢集落で地域づくりを行っている「中沢めん羊の里づくり組合」（円谷次男組合長）。現在は、集落内の六世帯が参加している。

きっかけとなったのは、集落の長老から「昔盛んだっためん羊で集落の活気を取り戻してはどうか」との提案があったことだ。めん羊は過去に多くの家庭で飼育していた経験があることや遊休農地の活用ができるなどの理由があった。

平成十七年度から「めん羊の里づくり」を始めて以降、先進地視察研修、集落内での協議、めん羊飼養管理研修会を繰り返してきた。平成十八年には待望のめん羊二頭を導入し、現在では二十頭ほどに増えた。「めん羊もなつくと寄ってくるし、鳴いて答えるようになるんです」と話す円谷組合長の目はとても優しい。愛情を注いで飼育していることが伝わってきた。

平成二十一年からは、子めん羊の出荷が始まった。組合では、一般に市場に出回っているラム肉ではなく、希少な「ミルクラム」に着目。「高原の鮫川うまいもの祭り」で販売される中沢産生ラム肉はあっという間に完売し、一度食べたら忘れられないとリピーターも多いという。

めん羊の放牧により耕作放棄地は減少。エサとなる草はできる限り地域内で自給することとし、ふん尿は堆肥に変え農地に還元するなど地域循環型農業が確立された。そして、平成二十二年、農業を核とした地域づくりの取り組みが高く評価され、豊かなむらづくり顕彰で農林水産大臣賞を受賞した。

1　今年４月に「めん羊ふれあい体験」を初めて企画し、幼稚園児を招き交流した／2　作業は共同で行い、作業の合間には各家庭から持ち寄った料理を囲むことが多い／3　６世帯が里づくりに参加し、集落の活性化を図っている

地域づくりが明るい兆しとなれば

現在は、昨年の原子力発電所事故の影響から放牧ができず、刈った草をエサとして与えることができない状況だという。しかし、これに負けてはいられないと、全天候型ハウスでの飼育や分散型肥育など新たな構想を練っている。

最終的には「集落の調和・絆」が目標と話す円谷組合長。

「将来、後継者不足でさびれてしまうのではないかという心配があります。しかし、何か一つでも明るい兆しが見えれば変わると思うんです。この地域づくりが若い組合員や子どもたちにつながっていってほしいです」と話してくれた。